

日本YMCA同盟

THE
YMCA

The Young Men's Christian Association News



No.854 2026

2026年3月1日発行（毎月1日発行）
1947年10月27日 第三種郵便物認可
本体価格45円（外税）（送料63円）
発行／公益財団法人 日本YMCA同盟
〒160-0003 東京都新宿区四谷本塩町2番11号
Tel 03-5367-6640 Fax 03-5367-6641
URL : <https://www.ymcajapan.org/>
発行人／田口 努 編集人／横山 由利亜



座談会

防災を考える——復興支援活動を振り返って

東日本大震災から15年。熊本地震から10年。阪神・淡路大震災からは31年が経ちました。「未曾有の大災害」からの月日を振り返り、各地で支援活動に奔走された方の中から4人にお話をうかがいました。

「あの日」から

——まずはご自身の経験を聞かせてください。

清水 東日本大震災の時、YMCAが支援に入った石巻市は、死者・行方不明者3800人余と、県内で最も被害が大きかった地域でした。私はYMCAの会員であり、ワイズメンズクラブのメンバーでもあったので、支援の受付窓口役となり、仙台の自宅から通って物資の調達や仕分けをしました。半壊だった自宅は、電気水道が復旧した後、支援者の宿泊所にもなりました。みんなで避難所を回り、仮設住宅ができてからは集会所を訪れて、歌の会、イチゴ農園の支援、餅つきなどを実施。復興団地ができてからは「津波教え石」の建立やヨガ教室なども行い、2016年には地元のメンバーと「石巻広域ワイズメンズクラブ」を立ち上げ、現在も活動を続けています。

丸目 私は熊本地震の時、益城町総合運動公園で勤務していました。YMCAが指定管理者として運営している益城町の施設なのですが、地震後ここは避難所となって最大1200人を超える避難者を受け入れ、YMCAがその運営を担いました。その経験からさらに、2020年の豪雨災害の際も、県南部の球磨村の避難所運営を担うことになりました。以来私は、熊本県防災会議委員となるなど、防災に関する会議に出席し、さまざまな研修の講師などもしています。

大野 私は阪神・淡路大震災が起きた当時、神戸市長田区の小学校で教員をしていました。自宅は無事でしたが、長田区は火災が激しく、学校は避難者であふれかえりました。その混乱の中で私たち教員は、全国からの救援物資やボランティアに支えられながら、避難所としての体制を整え、最大約1500人の避難者を受け入れました。この時の感謝の気持ちから私は今もなお、どこかで災害が起きると居てもたってもいられなくなり、各地でボランティア活動を続けています。12月には能登半島にも行きました。

田口 私は50年前、仙台YMCAで学生ボランティアをしていた時、フィリピンのミンダナオ島地震のワークキャンプに参加したのが最初の支援活動でした。1978年の宮城沖地震では被災した子どもたちのキャンプに関わり、横浜YMCAの職員になってからも、阪神・淡路大震災、東日本大震災と、災害のたびに現地に駆けつけました。1997年には横須賀に災害ネットワークを立ち上げる動きにも関わったほか、総主事となってからはスタッフやボランティアの派遣、他団体および被災地との協働支援活動などに携わっています。（＝2面へ続く）



清水 弘一さん
仙台YMCA常議員
石巻広域ワイズメンズクラブ



丸目 陽子さん
熊本YMCA職員
JVOAD運営委員



大野 勉さん
神戸YMCA会員増強委員
神戸ポートワイズメンズクラブ



田口 努
日本YMCA同盟総主事

●全国のYMCAのさまざまな活動はこちらからもご覧いただけます。 <https://www.ymcajapan.org/>

被災地の今…

清水 石巻は15年経って復興住宅も建ち、復興事業もほぼ終了して、街並みは整ってきました。でも人口は以前より2割弱減少し、さらに30年後には震災前の半分になると予測されています。産業も停滞したままですから、「復興した」と言われても複雑な気持ちです。何より、親しい人を亡くした方の悲しみや、コミュニティを失った寂しさは、簡単になくなるものではありません。津波で多数の犠牲者を出した小学校、津波から逃げる途中で親の手を放してしまったという人。3人の子どもを亡くした親。トラウマをかかえたままの人も多い。今なお言葉にならない思いが、変わらずにあります。

丸目 熊本でも同じです。避難所で暮らした方々は、やがて仮設住宅に移り、復興住宅の建設を待つ引越すまでに最低でも5年から10年。本来の住まいではない場所に住みながら、生活の再建をしてきました。しかも復興住宅が建っても、住民が戻ってくるとは限らない。人も街も災害前には戻りません。みんな、故郷が変わっていく姿を複雑な思いで受け止めています。にもかかわらず時間の経過とともに「復興した」と忘れ去られてしまう。風化を心配する声があります。

田口 私の実家がある福島県いわき市は、福島第一原発から30kmほどの場所なので、今も除染作業をしている人や、遺骨を探している人たちがいます。市内には原発で働く人や、帰還困難地域から避難している方など、さまざまな立場の人がいますから、住民同士で気持ちを共有することもできず、メンタルの病が増えていると聞いています。県外に避難したまま戻れない人も少なくありません。

大野 31年経った神戸でも、やはり身近な人を亡くした悲しみは消えません。一方で震災を知らない世代が増え、どう継承するかも課題になってい

ます。神戸YMCAは昨年、30周年を機に災害ワークショップを開催しましたが、被災者たちが痛みと共に残した教訓を無駄にしないよう、伝えていかねばなりません。

田口 YMCAの研修等では、今も各被災地を訪問していますが、忘れずにつながっていかねばなりません。「忘災」にならないよう「防災」が必要です。

心の復興とは

——なかなか癒えない心の傷に、私たちは何ができるでしょうか。

清水 「心のケア」は、専門医だけに任せておくべきものではないと思います。私たちは石巻で、心に傷をかかえた多くの人たちと共に、歌の広場やお茶の会などをして声をかけあってきましたが、そうやって小さな楽しい時間を共有したり、何気ない日常会話をしたりすることが、心の復興には欠かせないことでした。とにかく誰も一人にははいけない。「忘れていませんよ。いつも一緒ですよ」と、メール一本、電話一本でもいいからつながっていくことが、前を向いて生きていくために非常に大切だと感じています。

大野 私もそういう温かな心に支えられてきました。神戸の避難所で、支援団体の人たちと歌った「翼をください」に励まされたこともありましたが、お弁当の配布を手伝ってくれた小学生が「どうぞ」と声をかけながら手渡し姿に感激したこともありました。小さな温かさが、大きなエネルギーになりました。YMCAはレクリエーション指導などで、人を和ませたり、元気づけたりする力をもっています。小さなつながりでもいいので、長く継続して支援してほしいです。

丸目 私は「支援者のケア」も必要だと思いました。避難所には、突然家を失ったり、家族を亡くした

りした方々が集まりますから、特に最初は穏やかではありません。運営スタッフは、やり場のない思いをぶつけられることも多く、心身の調子を崩すスタッフもいました。被災地では、支援する側もまた被災者です。自分も被災しながら運営している。そこを理解し、被災された方だけでなく、支援者の心のケアにも取り組む必要があると思います。

田口 被災者-支援者という区分を越えて共感しあい、一人ひとりの心を大切にすることが必要ですね。聖書には「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」（ローマの信徒への手紙12-15）とありますが、それは災害時だけでなく、YMCAが日常の働きの中でめざすべき姿だと思います。

これから

——今後も起きると言われる災害に対して、私たちはどう備えておくべきでしょうか。

《備えること》

丸目 日ごろの備えは言うまでもないことです。個人・法人を問わず、ぜひこの機会に備蓄などの確認をしてほしい。また、災害時にごう行動するのか、事前に整理しておくことも必要です。

清水 想定されるリスクをよくシミュレーションして、マニュアルを作っておいた方がいいです。

大野 YMCAとワイズメンズクラブで共有できるマニュアルや互助体制の再確認をしておくことも有益だと思います。一地域のYMCAが機能できなくなった時にどうするか。どう協働していくか、一緒に検討しておきたいです。

《調整役の必要と人材養成》

清水 人材養成も必要だと思います。東日本大震災の時にYMCAのスタッフは、地域の社会福祉協



丸目陽子さん：豪雨災害後の熊本県球磨村で（2020年）



清水弘一さん（写真右端）：宮城県の特別養護老人ホーム「みやま荘」夏祭り



大野勉さん（写真奥左端）：能登半島の仮設住宅で歌の広場を開催（2025年）



田口努さん（写真左）：能登半島の避難所で設営作業（2024年）

要だと、各地でネットワークができました。

丸目 熊本でも、日ごろの顔の見える関係こそが、災害時に必要だということを実感しました。発災時にどういったニーズが生じるか。そして誰に何の協力を依頼したらいいのか。地域の事情や団体の得手不得手を知っていることで、初動がまったく違ってきます。

熊本地震の際は「くまもと災害ボランティア団体ネットワーク（KVOAD）」が設立され、活動団体の情報交換やコーディネートがなされました。今も熊本YMCAは各地域の自治会へ加入するなど、地域との交流をさらに活性化しようとしています。

清水 石巻では震災後、外国人が増えてきたので、外国の方とのネットワーク作りを始めました。町内会の防災訓練やお祭りにも参加してもらっています。まだ十分とはいえませんが、地域の主要産業は、もはや外国人なしでは成り立ちませんから、共助の防災対策も必要です。

丸目 熊本でも、さまざまな国籍の方々のコミュニティと協働して、地震の経験談を聴く会を開いたり、熊本県主導で外国人コミュニティと支援団体との防災ネットワーク会議を開いたりするなど、動き始めています。YMCAには留学生をはじめ多くの外国の方が関わっているので参加しています。

田口 最近「排外主義」が高まっていますが、災害時には、地域で支え合わなければ生きていけません。国籍によらず支え合わなければ、災害時は最悪の状態になります。関東大震災では、流言によって朝鮮人虐殺が起きました。今はSNS上で頻繁に

デマが拡散されています。根拠のない不信感、偏見、差別にとらわれることなく、信頼関係を築いておかなければ、災害に強い街とは言えません。

大野 阪神・淡路大震災の時には、倒壊した建物から救助された人の7割が、民間人によって救助されたというデータがあります。消防士など「公助」が不足しますから、近くにいる人による「共助」が重要です。「公助」の強化の必要は言うまでもありませんが、国籍を越えた連携が必要です。

《コミュニティ・ウェルビーイング》

田口 災害時には、日常の課題が浮き彫りになります。地域には外国人だけでなく、障がいのある人、一人暮らしの高齢者、一人親世帯など、さまざまな“災害弱者”といわれる人がいます。どこにどんな課題を抱える人がいるか知っておくこと。日ごろからしっかりと向き合い、支え合う関係を築いていくこと。災害時にはその共生の力が試されるといっても過言ではありません。

今、世界のYMCAがめざす「Vision2030」には、「コミュニティ・ウェルビーイング」、つまり誰もが幸福なコミュニティを作ることが、目標として掲げられています。YMCAは災害時によらず日々の働きの中で、地域の人とつながり、地域の課題に向き合い、一人ひとりが限りなく尊重される豊かなコミュニティをめざしていかねばなりません。

そしてこの日常の働きこそが、災害時のネットワークとなり、復興の過程においても、前を向いて生きていく力になっていくのだと思います。

写真で見るYMCAの支援活動

熊本地震

2016年4月、熊本県で震度7の地震が2度起きる前例のない災害が発生。熊本YMCAが指定管理者として運営していた益城町総合運動公園と御船町スポーツセンターは避難所となり、合わせて2000人近い避難者を受け入れました。全国のYMCAは職員・会員を派遣してこれをサポート。仮設団地に移った後も「地域支え合いセンター」事業を受託し、生活相談や子どものケアに力を注ぎました。



益城町総合運動公園
指定管理者が、行政から指定避難所の運営を委託されるのは国内でも画期的なことだった



御船町スポーツセンター
益城町と同様、熊本YMCAが指定管理者として約半年間、避難所を運営。最大250人が暮らした



阿蘇YMCA
宿泊施設を開放しボランティアセンターを開設。1年間23000人以上のボランティアが利用



仮設住宅でのサポート
生活相談のほか、アロマテラピーなどイベントを開催。孤立を防ぎながら生活再建をサポートした



保育園での預かり
片付けなどで忙しい保護者の要望を受け、地震からわずか10日後に保育園を再開した

▼熊本YMCA防災ページ
熊本YMCAは2016年4月の地震以降、支援の様子や町の近況をブログに掲載。2020年の豪雨災害、2024年の能登半島地震についても記載されています。



<https://www.kumamoto-yymca.or.jp/bousai/>

東日本大震災

2011年3月。未曾有の大災害でYMCAは、「盛岡YMCA宮古ボランティアセンター」「仙台YMCAボランティア支援センター」「YMCA石巻支援センター」の3拠点を設置。全国から職員・ボランティアを派遣して、泥かき作業や避難所の支援をしたほか、子どもの学習やキャンプなど中長期的に活動。福島第一原発事故による避難者を対象に、数々の保養キャンプも行いました。



仙台YMCA
泥かきや救援物資の配布をはじめ、農園の手伝いや老人ホーム支援、子どものキャンプなど、長期的に幅広く実施



YMCA石巻支援センター
石巻駅前に拠点を設け、国内外のボランティアを受け入れた。現在はワイズメンズクラブが運営



盛岡YMCA宮古ボランティアセンター
地震直後から4年にわたり駐在職員を派遣し、多角的な支援活動を行った。現在も活動継続中



福島支援
放射能の影響を心配する福島のご家族を保養キャンプに招待。企業等の協賛により約4000人余が参加した



海外からも多数の支援
募金のほか、ボランティアも多数来日した。写真は、2008年の四川大地震で被災した中国・成都YMCAからの手紙



▼「東日本大震災YMCA救援・復興活動レポート2011-2017」
盛岡、仙台、石巻、福島における6年間の活動を総括（日本YMCA同盟発行。A4版24頁）

阪神・淡路大震災

1995年1月17日。震度7の激震で神戸YMCAは、会館を失いながらも3つの災害ボランティアセンターを開設し、延べ6万人のボランティアを受け入れました。避難所も運営し、仮設住宅をサポートするなど、時期に応じて支援。国内外のネットワークによる支援を組織化した経験は、その後の東日本大震災や熊本地震での支援活動の原型となって受け継がれました。



取り残された高齢者や障がい者がいないか、地域を巡回するスタッフ



救援物資を運ぶボランティア



ボランティアのコーディネートをする神戸YMCA職員



避難所に水を届けるボランティア



震災直後から続けた炊き出し



自らも被災しながら支援活動を展開。のちに厚生大臣・兵庫県・神戸市・西宮市等より感謝状を受けた

能登半島地震／豪雨復興支援 輪島市の小中学生がスキーキャンプ

能登半島地震から2年。いまま復興途上の能登の子どもたちを応援したいと、YMCAは1月10～12日、富山県の立山青少年自然の家でスキーキャンプを開催しました。輪島市の小中学生32人のほか、滋賀YMCAと富山YMCAの子どもたち22人、ボランティア、スタッフなど計70人が参加。中には昨年のキャンプが楽しかったからと、お友だちを誘ってきたりピーターもいました。

雪の多い能登半島ですが、今回の参加者はスキー初心者が多く、どきどきしながら片足スキーをしたり、ハの字での滑走に感激したりと、はじめてのスキーを楽しむ姿が見られました。1日目の夜には雪遊び、2日目の夜にはご当地クイズ大会など、スキー以外も盛りだくさんのプログラムで、元気いっぱいに過ごしました。



保護者の声

輪島市は震災後、子どもの数が半減しました。遊び場だった運動場は仮設住宅になり、家でゲームすることが増えました。工事車両が多くて自転車も危ないため、行動範囲も限られています。

大人は家業の復興で忙しく、家族旅行などできませんから、YMCAのキャンプはありがたいです。娘はこれまで3回参加させていただきましたが、いつも「また行きたい」と言って帰ってきます。今回も、新しくできたお友だちのことなど、お土産話を聞かせてくれました。

2年が経ち、報道も減りましたが、私たちは町の復興に向けて頑張っています。時おり声をかけていただくと嬉しいです。(小学4年生の保護者)

我が家は地震で全壊してしまいました。家族は全員助かりましたが、子どもは精神的ショックが大きくて、特に下の子は家でも一人でいられないなど、不安定な状態が続きました。

震災から2年が経ち、少し落ち着いてきたので今回キャンプに参加しました。スキーもお泊りも生まれて初めてでしたから、本当に大冒険でしたが、帰ってくるなり「楽しかった!」と。不安が自信になった様子で私も嬉しくなりました。いつもは控えめな上の子も「また行きたい」と懇願するので、今週末に家族でスキーに行ってみることにしました。

この2年間、怖かったこと、寂しかったこと、たくさんことができましたが、楽しい経験や新しい出会いの中で、元気に育ってほしいと思います。(小学2年生、4年生の保護者)

このキャンプは、皆さまからお預かりした募金によって開催いたしました。YMCAは今後も、被災地の子どもたちの成長を応援していく計画です。

国際交流奨励賞受賞 広島YMCA専門学校

2022年から、ウクライナ避難者の日本語学習支援を続けてきた広島YMCA専門学校が1月28日、「公益財団法人ヒロシマ平和創造基金」より国際交流奨励賞を受賞しました。

広島YMCA専門学校の言語コミュニケーション科日本語コースは、10数カ国から250人余の留学生が在籍する日本語学校です。軍事侵攻によって広島に避難してきたウクライナの方々になればと、日本語教師たちが月2回、避難者の居住エリアに出向いて日本語学習を支援してきました。避難者の多くは夫を本国に残してきた母親と子どもたちです。時には就労相談や教育相談、日本文化の理解など、語学だけではないサポートが必要ですが、教師たちは長年にわたる留学生の指導経験を活かして支援を続けています。

「ヒロシマ平和創造基金」は、広島市民の平和への願いを実現しようとさまざまな国際交流イベントや多言語での情報発信などを行っている団体で、広島YMCAの取り組みは、国境を越えた平和創造に資する活動だとして、表彰されました。 広島YMCA 中興 岳生



2025年度 日本YMCAユースボランティア認証者

今年度は18YMCAから244人がYMCAの担い手として仲間に加わりました。

*この認証制度は1994年から開始され、これまでの認証者総数は19,100人になりました。

〈YMCAボランティアの定義〉YMCAのボランティアとは、日本YMCA基本原則に示されている使命の実現のために、YMCAの行うさまざまな活動や組織の運営、また、YMCAが他団体と協働して行う諸活動に①自らの自由な意志によって(自発性)②主体的に、責任をもって参加し(主体性、責任性)③金銭や名誉などの報いを目的とせず(無償性)④人々や社会のために働き(利他性、社会性)⑤人々と痛みや喜びを分かち合い(相互性)⑥継続的に(継続性)喜んで自らの時間や労力、知識や能力、金銭などを提供する者をいう。

北海道YMCA	島倉 あゆ美	加藤 瑞貴	鈴木 来夢	梶本 健太	宇賀 誠也	野々村 奏	濱田 菜々美	小島 怜	姫路YMCA	満富 七楓
北野 菜々子	澤畑 秀美	唐澤 蘭	濱村 茉那海	カルナタクスハニ	梶田 悠斗	竹原 歩己	大脇 慶久	片岡 柚稀	小林 日菜向	久保田 菜央
小西 絢子	嶋本 美優	繁田 イケム	天野 朱莉	手塚 惺太	原田 憲征	岡嶋 彩音	坂口 直輝	加賀瀬 璃玖	清水 愛子	福山 佳音
仙台YMCA	宮尾 菜乃花	福田 加慧	西村 陸玖	手塚 紗雪	滋賀YMCA	中野 太陽	松原 敦也	和歌山YMCA	中上 雅琳	福屋 楓
一ノ渡 そのか	橋本 詩祈	飯塚 彩	山中 梨子	眞下 煌矢	菅原 絆	佐賀 洸太	松本 理央	山際 瑠奈	YMCAせとうち	功刀 瑠璃
菅野 華	岩元 百花	辻 勇翔	森 海	設楽 晴貴	石塚 風美	大阪YMCA	赤岸 達哉	綿田 修士	小川 莉実	熊本YMCA
菅野 真叶	比企 奏美	高原 朗	吉川 榮春	田中 琥太郎	小寺 拓飛	宮城 帆乃加	山田 ひかり	中野 倫彰	古田 莉沙	伊藤 孝竜
久保田 羽菜	畑 恵梨花	川内 梨叶	北見 大和	二木 海成	京都市YMCA	上江洲 朋子	蒲田 奈帆	城谷 晃成	藤澤 春輝	黒田 愛
佐藤 寛孝	東京YMCA	大賀 紗菜子	浅羽 真帆	加藤 優	粟路 心咲	上原 葵音	久世 裕太	下出 幸胤	神村 心彩	古庄 紗也
武山 ほのか	池田 麻祐子	山内 和樹	藤原 誠也	美島 蘭夢	遠藤 理子	譜久山 姫佳	文野 成雄	松本 燎	出石 彩瑛	池田 心結
富樫 朋海	小泉 幹人	横浜YMCA	小亀 太陽	深井 さくら	川越 優衣	安森 心美	関口 楓	三本管 琴己	児島 亜依	矢野 穂花
とちぎYMCA	酒井 康生	林 夢歩	石川 水悠	大山 紗輝	武内 希颯	小野 史織	安樂 力大	安本 祐子	阿部 恵	畠村 圭真
小林 実命	福元 来実	井上 心晴	竹本 幸瑚	武田 万里	富岡 優衣	尾坂 夏輝	國見 和宏	神戸YMCA	藤井 乙葉	外山 幸樹
佐藤 蒼依	足立 百々葉	鈴木 周兵	大島 歩佳	名古屋YMCA	中川 蒼大	諸見 彩華	前橋 由衣	上野 生吹輝	日下 結	宮本 陽翔
本多 葵衣	新 真緒	角田 紫穂	大熊 暹日	東本 万那	福井 愛大	垣花 なつこ	藤本 志枝	小野 実来	川崎 涼太郎	重久 怜未
下田 さくら	半田 百花	仲村 陽菜子	木村 昂	小林 叡代	藤井 那華	山川 りえ	溝口 璃沙	佐伯 奈央	守分 綾星	三川 翔夢
鶴飼 聖空	小泉 諒	加茂 千沙季	佐々木 百桃	浅野 秀太	奈良YMCA	尾西 杏奈	福本 悟	延藤 想	広島YMCA	空 帆奈美
福地 葵衣	大淵 志帆	ブラウネル 留果	永井 たまさ	山田 樟菜	箸尾 泰良	飯田 菜心	仲野 智恒	山根 脩斗	吉川 小百合	河野 結衣
千葉YMCA	伊藤 孝一郎	野末 ひなの	上田 舞衣	石垣 笑奈	高木 良倅	日野 美咲	竹本 幸未	阿部 心咲	浅野 由梨香	橋本 優来
大橋 千花	大町 美詞	今井 味兎	石渡 寛太	岩井 大樹	永見 桜子	浦 綾音	高岸 千晴	三好 功太郎	藤本 萌	木下 春香
古川 花乃	米山 晶	保坂 拓真	近藤 侑隼	大島 未結	山本 翔生	清水 美優	鳥屋 渚	北村 心暖	福岡YMCA	廣瀬 健斗
鈴木 楓葉	木村 光玖	成井 舞佳	熊倉 輝皓	長野 碧	和野 夏希	小濱 塔子	谷井 志都乃	内山 結萌	松尾 穂奈美	内野 亜夢
松本 莉歩	千野 深月	信清 理子	小池 歩斗	本多 真哉	瀧川 笑玄	桃井 美咲	西野 純平	二木 春佳	中村 亜美	
黒田 晃正	櫻井 奈々	殿生 大成	畠山 粹	山本 空来	五百 日和	宮本 葵	洲崎 優実	太田 礼香	井川 采香	